

トップローディング方式 CD プレーヤー

ご使用上の注意

平素は、弊社製品をご愛用いただき、誠にありがとうございます。トップローディング方式 CD プレーヤーでは、ディスクの情報を読み取るピックアップ部が露出しているため、外部要因からの影響を受けやすくなっています。特に最近、弊社ウェブサイトにおいても注意喚起しておりますので、ご理解の上、安全対策をしてください。

■太陽フレアによる光学・電子機器への影響

2023年1~2月にかけて太陽活動が活発になり、記録史上で最大級 X クラスの太陽フレア（爆発現象）がたびたび観測されています。このため、X 線パルスや電磁放射線により、光学・電子機器に影響を及ぼす恐れがあります。弊社の CD プレーヤーでも、光学系ピックアップが劣化する症例が最近増えており、その一因として太陽フレアによる障害が考えられます。また、太陽からの高エネルギー帯電粒子や宇宙線などでレーザー受光素子（フォトダイオード）が欠損し、感度低下を招くこともあります。S303、S503、S507 など金属カバーのない機種については、使用しないときは念のため金属板や金属箔（アルミホイルなど）で覆い、ピックアップを保護していただくことをお勧めします。S515 では、天板カバーを閉じてください。

■長く使用しないときは電源を切ってください。

通電中は、光学系ピックアップが磁界を帯び、外部要因からの影響を受けやすくなります。また、通電中はレーザー光を出し続けるため、ピックアップ内部にある半導体レーザーの劣化が早まり、正常に読み取れる強度のレーザーを出力できる寿命が短くなります。

いわゆる「24時間つけっぱなしで通電するとオーディオ機器の音が良くなる」という通説は、半導体を使った機器では、残念ながらあまり理論的根拠がありません。発熱や帯電により劣化が進み、却って機器の寿命を縮めることにつながります。このため、適度な暖機運転を除き、長く使用しない場合は必ず電源を切ることをお勧めします。

■CD の製造品質には、ばらつきがあります。

有名レーベルの CD ではあまり問題は生じませんが、中心軸がずれていたり（偏心ディスク）、反射率が低い（金色の透けた）ディスク、自家製の CD-R、廉価なインディーズ版、ピット（ディスク上に刻印されたデジタル情報の記録）の精度がわるいディスクなど、市場にある CD の製造品質にはばらつきがあります。ピックアップが新しく、比較的レーザー強度が維持されている場合は、どんなディスクでも大抵は読み取ることができますが、使用頻度によりピックアップのレーザー強度がしだいに落ちるため、問題のあるディスクから順番に読み取りエラーが起りやすくなります。

読み取り信号波形を測定しながらレーザー強度を調整できることもありますが、調整範囲を超える場合は新しいピックアップに交換する必要もあります。ディスクにより"unknown disc"や"can't play disc"のメッセージが頻繁に出る場合は、弊社までご相談ください。

■太陽フレアに備えた安全対策

太陽活動はおよそ 11 年周期で活動期と静穏期を繰り返すとのことで、今後数年間は非常に強い太陽フレアが突発的に発生することが予想されます。人工衛星や通信機器を損傷する可能性があるほか、磁気嵐による通信障害、GPS、電力網が過負荷になる恐れもあります。身近な例としては、家電製品やパソコン、スマートフォン、デジタルカメラ、通信機器、電子楽器、カーナビ、自動車本体などが挙げられます。

これらの電子部品を搭載した機器では、ネジ・モーター・歯車などの機構部品、抵抗・コンデンサ・コイルなどの受動部品よりも、特にトランジスタや IC などの半導体、集積度の高いマイコンや LSI、液晶パネルや CCD などの光学素子が損傷する恐れがあります。針金と金属板で作られた真空管は、意外と大丈夫かもしれません。金属ケースでシールドされたものは比較的安全とされ、プラスチックケースのメモリカード、USB メモリなどは、丈夫な金属ケースに入れるか、金庫（鍵で開けるもの）や冷蔵庫などに保管することをお勧めします。CD-R や DVD-R として貴重なデータをバックアップで保存しておくことも、安全対策のひとつです。大きなものは、通電しない電子レンジや、ビルの地下に駐車した自動車の中に一時的に避難させるのもよい方法です。

ひとたび強力な太陽フレアが発生すると、停電だけでなく、携帯基地局やインターネット回線が不通になることもあります。いざという時に備えて、電池で動くアナログ方式のラジオ、電気仕掛けでないストーブやカセットコンロなど、できるだけ原始的でローテクなものを備えるとよいでしょう。電子制御を含まないクラシック・カーが一部のマニアでもてはやされたり、アナログレコードが復興したり、昔ながらのアコースティックな楽器が再び注目されるのも、こうした時代を先取りする風潮なのかもしれません。